



発行

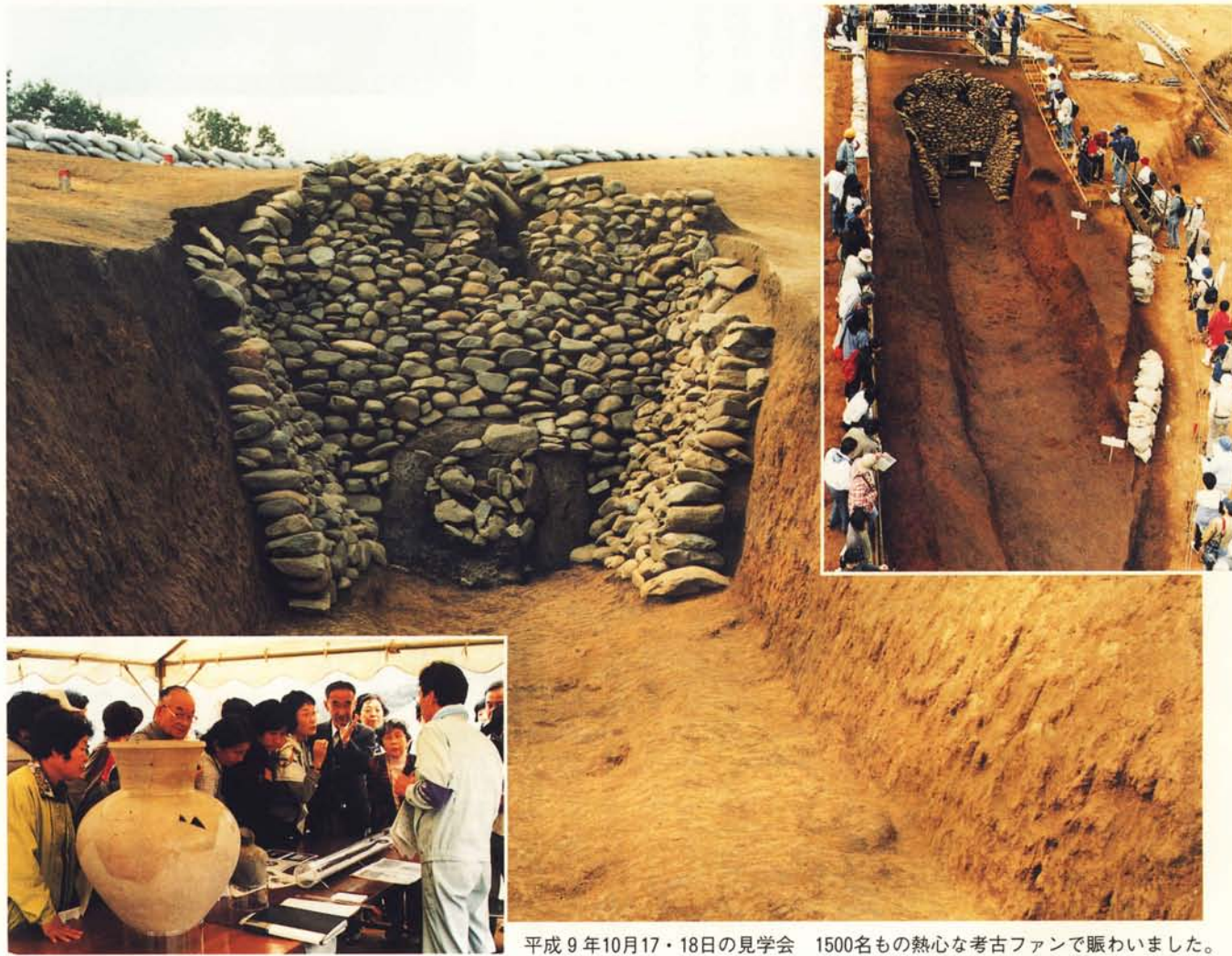
財団法人 東京都教育文化財団
 東京都埋蔵文化財センター
 〒206-0033
 多摩市落合1-14-2
 ☎ 0423-73-5296

たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 42

平成10年2月20日

<http://www.tef.or.jp/maibun/>



平成9年10月17・18日の見学会 1500名もの熱心な考古ファンで賑わいました。

大規模な石積みみの横穴墓

調査研究員 大西 雅也

横穴墓は、斜面に穴を掘り込んで墓とするもので、古墳時代後期に全国各地でつくられました。ここ多摩ニュータウン遺跡群でも20基ほどが調査されましたが、最近、町田市小山にあるNo.313遺跡から、めずらしい横穴墓が発見されました。

横穴墓は、大抵、何基か群集するのですが、この横穴墓は単独で発見されました。遺体を安置する墓室に通じる前庭部は、幅4mで長さが19m以上もあり、全国でも最大級の規模を誇ります。奥壁と両側壁に大きな河原石を、高さ3.4m、奥行き4.2mにわたってびっしりと積み上げています。河原石の総重量は、5.2トンにも達します。

墓室に通じる羨道部は閉塞されています。墓室の規模は、奥行きが7m強、幅が3m強、高さが2m強で、床には拳大の礫が敷き詰められていました。

遺物は、前庭部から直刀・鏢・鉄鏃・須恵器大甕、同フラスコ形瓶が、墓室から刀子2点が出土しました。このことから横穴墓は、7世紀後半に付近一帯を支配していた人が造営したものと思われる。

この石積みされた横穴墓は、都内で5遺跡目ですが、迫力ある石積み構造は、当時の技術水準の高さと埋葬者の権勢を想像させてくれます。

遺跡だより ⑤



北区 袋低地遺跡

袋低地遺跡は、荒川に面した北区赤羽北二丁目にある文字通り低地の遺跡で、武蔵野台地の北東端の、通称赤羽台の崖線下に沿うように広がっています。

今回、当センターが発掘調査するようになったのは、埼京線北赤羽駅の赤羽口側の再開発計画が具体化し、都建設局から調査を委託されたものです。平成九年八月に調査を開始して、現在、三地点を調査しています。これまでに縄文時代中期後半の地貝塚、同後期後半から晩期にかけて存在したらしい河川の流路を中心に、近世等の建物跡や水田跡なども検出されています。これらの中から、縄文時代の自然流路の調査状況をお知らせします。

流路は遺跡の南西方向にある谷部



付近から、現荒川に向かって注いでいたようです。現在、調査中のB区では、流路を埋める木質泥炭層の掘削が終了したところですが、流路にはおびただしい流木が散在していました（左写真）。これら流木にはつきりした加工痕を認めることはできませんが、板状のものやほぞ穴が穿たれたようなものもあり、今後の調査の進展が期待されます。

流木の他の自然遺物には、クルミヤトチノキなどの堅果類が多く、昆虫の殻なども確認されています。

縄文土器は、中期後半から晩期中葉まで出土していますが、量的には後期がもつとも多いようです。土器は流路内からが多いものの、比較的

良好な個体は、流路の肩や落ち口に出土する傾向があります。また、磨製石斧や石皿片も出土しています。これから砂質泥炭層の調査に入りますので、さらに多くの出土遺物が

保存科学室「こぼれ話」(六)

— 横穴墓発掘の科学調査 —

昨年夏に発見された横穴墓については、表紙でも紹介されています。

保存科学室では、墓室の発掘の段取りを協議する資料を得るため、墓室内の環境測定と状況を観察する等、科学的な調査を行いました。

一千年以上も地中にある横穴墓の内部は全くわかりませんので、まず、環境測定用の空気吸引チューブ（径5mmのシリコンパイプ）を釣竿に取付けて、羨門の上の隙間から挿入してみました。

すると、80cmほど入った所で土に突き当たったので、次に、オリンパス光学工業の協力を得て、胃カメラのようなファイ

バースコープで内部を観察しました。グラスファイバーチューブを挿入して覗くと、羨門の50cm先から崩落し

横穴墓内外環境測定結果

	横穴墓内	外 気
酸素 (%)	19.0	20.1
二酸化炭素 (%)	1.7	0.004
温度 (℃)	18.2	27.4
湿度 (%)	97.7	50.5



この表から、横穴墓内の空気が、外気とかなり違っていることが判明しました。この数値は、出土遺物のサビや劣化過程を探る、保存科学研究の重要なデータとなります。

ファイバースコープで羨門部が崩落していることが観察できたので、羨門部から調査する通常の方法は危険と判断して、天井から掘り下げる方針を下しました。

今回、墓前域の石積みを崩さずに墓室を調査し得たのは、科学的な調査の成果でしょう。（門倉 武夫）

見込まれます。低地の遺跡から検出されるさまざまな人工遺物とともに、自然遺物や土壌等の分析から、当時の生活環境の復元を図っていきたいと思います。（西山 博章）

た土の山で閉鎖されていました。

つづいて、墓室の真上からボーリングステッキで探査すると、埋まり切っていたわけではなく、1.4m下に40cm程の隙間が確認されました。この場所で内部の酸素、二酸化炭素濃度、温度、湿度を環境測定しました（表）。

大名屋敷の顔？

徳川御三家筆頭である名古屋尾張藩主徳川光友が、ここ市ヶ谷の台地に屋敷地を拝領したのは、明暦二（1656）年のこと。二年後の万治元（1658）年には、それまでの鼠穴邸から、上屋敷としてのすべの機能をこの地に移しました。以降、市ヶ谷邸は尾張藩の表舞台として、幕末までその偉容を誇りました。

文化財講座 <32>
大江戸掘りもの帖～其九～

尾張徳川家は將軍家に次ぐ格式、それに見合った屋敷としての敷地と御殿でなければなりません。「他の大名屋敷とは別格」という違いを、誰でもひと目で納得するようにしておかなければならなかったのです。

だからといって、屋敷内を覗かれるようではなく、外見で、「尾張さんは凄い！」と思わせるには、………表門です。立派な、大きな表門が、その家の格式の高さを誇示することになるからです。

文政八（1825）年に作成された絵図の、長さ二十間・幅二間の建物の中に、表門は、長さ四間・幅二間の規模で組み込まれています。

絵図は平面的なものなので高さは判りませんが、明治時代の初期に撮



表門の調査（東より）

影された写真から、二階建て民家の高さほどはあったと推定されます。表門の手前には、幅十四間、奥行二間の、壁で区画された階段が十段ほどあって、現在の靖国通りに続いていたと思われる。

「一度でいいからそのような門をくぐって入るようなお屋敷に住みたいもの」さぞ気分がいいことでしょう。しかし、この表門は、屋敷の主である尾張藩主でさえ、滅多に通り抜けはできなかつたのです。

表門は別名、「御成門」とも呼ばれます。將軍が家臣の屋敷に出かけることを「御成り」といいますが、その時に將軍を迎えたり、公式の行事の際に使われたのが、この表門なのです。普段に藩主が使用していたのは、「田安門」といって、表門前の階段から二十四間ほど東にあったと推定されています。

現在、尾張藩上屋敷跡遺跡では、37地点を調査中です。（写真）は、表門が組み込まれた建物の北側に沿って設置された石組溝と、玉石が敷かれた状態を、東側から見たものです。来年度も、引き続きこの表門の東側を調査する予定です。

（並木 仁）

遺跡調査の発表会

第23回を迎えた今年度の東京都遺跡調査研究発表会が、二月一日（日）に千代田区公会堂で開催されました。昨年に調査された都内遺跡のうち、14遺跡の調査成果を都民に公開するもので、当センターからも次の2件が発表されました。

- 大西雅也・川島雅人 「町田市多摩ニュータウンNo.313・960遺跡」
- 並木 仁 「新宿区尾張藩上屋敷跡遺跡」

文化財防火デーの消防訓練

一月二十六日は、法隆寺金堂壁画が焼失した日に因んだ文化財防火デー。日本の各地で文化財を焼失から護るための消防訓練が催されました。当センターでも、改めて火災等への注意を喚起するとともに、誘導避難と円滑な初期消火をめざした訓練を行いました（写真）。



展示ホール休館のお知らせ

現在、展示中の「丘陵における文化の醸成」は、三月八日（日）をもって終了し、九日から十四日まで、平成十年度の展示に向けた展示替えのため、休館します。

文化財講演会

「文化の醸成」に因んだ本年度の第四回講演会として、十一月八日（土）に、長野県長門町教育委員会の大竹幸恵氏による、「黒曜石の採掘と交易」の講演と、映画「諏訪のおんぼしら」を上映しました。

忙しい勤務の合間を縫って、鷹山遺跡群で採取したという黒曜石のお土産もあって、142名もの大勢の参加者は、終始、上機嫌でした。

第五回は、平成十年一月二十四日（土）に、日本陶磁協会常務理事の村山武氏による、「朝鮮と日本のやきもの」の講演と、映画「日本列島と朝鮮半島」を上映しました。

村山氏は、日本にもたらされた朝鮮半島のやきものの歴史を、技術の伝播と製品の招来に整理され、該博な知識と巧みな話術で会場を魅了しました。多くのやきものファンや朝鮮にゆかりの方の顔も見え、講演会ははじまって以来、182名という記録的な参加者を数えました。

本年度の最後、第6回は、平成十年二月十四日（土）に、当センターの竹尾進副主任調査研究員による、「中世の流通経済——銭貨」の講演と、映画「八王子城」を上映しました。参加者は104名を数えました。



村山武氏（左）と大竹幸恵氏（右）の講演風景

インターネット ホームページ

当センターの展示や催し等を紹介するホームページをご利用ください。アドレスは、本紙のタイトル下に掲載してあります。

遺跡の現地説明会

秋から冬にかけて、多摩ニュータウン No.313 遺跡の横穴墓と、汐留遺跡の見学会を行いました。

横穴墓の見学会は1面でも紹介し

ましたが、新聞等にも大きく取り上げられたことから反響をよび、二日間で千五百人もの見学者が訪れました。町田街道から入った山間の路地は、時ならぬ混雑ぶりです。関係者は対応にたんでこ舞いでした。

汐留遺跡の方は、これまでは秋が恒例でしたが、今年は師走も半ばの十三日という、慌ただしい時節の催し。新聞等の関心事も他にあつてか P・R 不足も否めず、参加者は昨年の半分の700名に止まりました。

今回の見どころは、初めて公開される会津藩邸の長屋等の建物跡や排水施設、上水施設等でした。

併せて、これまでに発掘された出土品の中から選りすぐりの遺物が、種類や用途別に整理されて展示されました。折よく、港郷土資料館から譲られた特別展の展示パネルも陳列され、さながら発掘現場と博物館が一体となった、臨場感に富む分かりやすい見学会となりました。



会津藩邸の見学風景



雪の遺跡庭園

暖冬の余波でしょうか、……。いつもなら二月中旬になって降る雪が、一月は二度も見舞われて、庭園もすっかりと雪化粧しました。

海外研究者の講演会

日韓文化交流基金により来日中の、国立釜山大学校教授朴英哲氏による、「韓国・密陽市・古禮里遺跡における後期旧石器時代の発掘」を、三月二十日（金）五時半から行います。

朴氏は、都立大学考古学研究室（小野昭氏）が受け入れ機関となつて、昨年九月から日本の旧石器文化を学ばれています。展示替えなったホールを見学がてら、ご来館ください。